

港南台ウオッチングPart 2

村田和義

●はじめに — 新興住宅地の活動

エネルギー

長い間貧しい農村であった港南台地区は、昭和四十四年秋から日本住宅公団による大規模な宅地造成が行われ、四十九年から急激な人口流入が始まった。それから十二年。港南台は、人口約二万七千人の一大ベッドタウンとして、今なお成長しつつある。

この若く新しい住宅地にどんな「地域」が形成されているのか「まち1986」で「ウォッチング」し

てみた。その結果、港南台では様々な活動が活発に自主的に行われ、新しいふるさとの「人の輪づくり」が着実に進んでいることがわかった。

港南台は、新興住宅地である。それゆえ、全国各地から移り住んだ人たちが、各々孤立して生活しがちである。しかし人はいつまでも孤立して生きられるわけではない。この新しいふるさとに「ふれあい」を求め、人は様々な活動を始める。港南台では人口増加が急激であった分、こうした活動の芽も数多く生まれ、それらが今、花開きつつあるのだ。

この地にきわだつ活動の自発性は「ふれあい」を求める新興住民のエネルギーが源泉であると言えよう。

それでは、人々はそうした中で、どのようにして「地域」と出会い、「人の輪」の中に入り、それを育てていくのだろうか。ここでは、開発後間もなかった頃の港南台で「人の輪」を作ってきた人たち、そして、今港南台で「人の輪」を作りつつある人たちのインタビューを通じてそれを具体的に明らかにしてみたい。

●母と娘の十二年間

佐藤敦子氏・季緒氏の場合 —
そして尾崎みつ子氏の場合 —
コミュニティペーパー「はまかぜ」で洋港版（洋光台・港南台方面）の編集をしている尾崎みつ子氏（港南台七丁目）とは、何度か取材先で一緒になって顔みしりになった。カメラを構える者同士の連帯感（？）から、いろいろ話をするようになり、「今度、夫が自治会長をやるんです。広報よこはま、ちゃんと配りますよ」とニッコリ笑ってくれたのは、五十九年の二月頃である。

●はじめに

●母と娘の十二年間

●おたまじゃくしはカエルになった

●「休み時間」がにぎやかデス

●お母さんはPTAのカメラマン

●ワタシ「子供会」、アナタ「自然保護」

●「ほっぺん」はまだヨチヨチ歩き

●「あの頃」を知ってるヘンな優越感

●「地域に根づく」友だちの輪ッ!

●新興住宅地の地域連帯の条件

「はまかぜ」の取材と普段の地域活動により、尾崎氏は港南台で実に豊富な人脈を持つ。何度か人を紹介してもらいうちに「尾崎人脈は、港南台の財産のひとつだ」と思うようになった。相手の要望に応じて、すぐに適切な人材を紹介することができ

る。それは、尾崎氏が、港南台の重層的構造の各側面に通じているからに他ならない。そういう人がコミュニティ・ペーパーのアンテナ役として存在するということは、地域にとって大きな財産と言えるはずだ。

その尾崎氏に紹介していただいた人の中で一番活躍してくれたのは、港南台七丁目に住む大学生の佐藤季緒氏である。広報よこはま港南区版紙上で区長と対談したほか、港南区役所で制作するPR映画のレポーターをやっていた。年齢の差を気にせず誰でもなごやかに話ができる明るい性格は、高校時代のアメリカ留学によって培われたらしい。そんな彼女から、お母さんの佐藤敦子氏を紹介されたのは、六十一年七月初めである。数日後、敦子氏から

「アメリカとオーストラリアから留学して横浜市内にホームステイしている高校生たちが、七月八日に港南台第一小学校を訪問するんです。毎年やってくる行事です。ビデオに撮ってくれませんか？」と話があった。

佐藤敦子氏は、季緒氏の留学をキッカケにYFU (Youth for Understanding) という団体の日本側の地区委員になった。YFUというのはアメリカの国務省が公認する高校生交換留学の団体だそうだ。それで、この六年間、佐藤家には毎年外国人が家族として一緒に住んでいるという。留学生の小学校訪問も、YFUの行事のひとつである。

七月八日、佐藤親子は大活躍だった。横浜の地区委員のとりまとめ役である敦子氏は、学校との折衝、ホストファミリーとの連絡など、この行事の大黒柱であった。そして、日本語がまだよくわからない留学生への通訳は、すべて季緒氏が行った。そんな大役を、笑顔をやさしくこなしていく母と娘。自分たちの手づく

りの国際交流を生き生きと進めている清々しさが感じられた。

佐藤家が港南台に引っ越してきたのは、長女の季緒氏が小学校四年生のときである。まだ港南台に小学校は一校もなく、季緒氏は、洋光台第四小学校に通った。

五年生になって、季緒氏は、児童会の副会長に立候補した。トイレにポスターをはるPR作戦が功を奏して(?)当選。学校とのつながりも深くなった。

そして、その年の二学期には、港南台第一小学校が開校し、季緒氏は五年生の秋に、開校と同時に転校した。「初めは水道も使えなくて。毎日お弁当と水筒を持って、遠足のようでした」と季緒氏は当時を振り返る。

一方、母親の敦子氏は、第一小学校の開校に向けて開校準備委員をしていた。洋光台第四小学校で季緒氏が児童会をやっていたことが、敦子氏をそういう場に出やすくしたそう。そして「その時に、地元的地主さんたちと交流が始まったんです」

と敦子氏は回想する。

港南台に初めて開校する小学校のために、以前から住んでいた地主たちが寄付を集めてくれた。「地主さんたちは、たいてい子育てが終わった世代でした。その人たちが、自分の子どもが入るわけでもない学校のために寄付を集めてくれたのを見て、私たちも何かしなければ……」そう思って佐藤敦子氏ら当時百軒程度の父母たちは、協力して開校祝賀会の資金づくりを始めた。廃品回収である。

当時の港南台は新築工事と引っ越しが日常茶飯事であり、廃品には恵まれていた。祝賀会が終わっても、父母たちは廃品回収に精を出した。開校後に発足した世話人会が中心になった。「家のローンをかかえて、みんな生活は大変だったと思います。私たちが学校に寄付できるものって言ったら廃品回収の労働力しかなかったんです。でも、みんな若くて生き生きしてました。教室に時計がひとつひとつかかるたびに本当にうれしかった」

自動車を持っていた敦子氏は、連絡や運搬に便利だったので、自然とライダーになっていった。まだ道路も整備されていない港南台を敦子氏のスバルが元気よく走り回った。めじろ団地の入居が始まると、管理組合と交渉して団地内の廃品回収も始めた。

「今から思うと、最初に廃品回収から始めたことが、とつてもよかったです。みんな軍手をはめて前かけをしてリヤカーを引いて(笑)。気どったところなんかひとつもなく、心の垣根がすぐにとりはらわれました」——当時、どの家も新築で、仲間同士集まっては、よくおしゃべりしたそうだ。現在、港南台連合自治会婦人部長を務める松井佑子氏(本誌「女性パワーを忘れないで」参照)や「あかとんぼ文庫」(「まち1986」参照)の大井悦子氏、「いじょうぶ会」(「まち1986」参照)の田中恵美子氏など、みんな当時、本音で語りあった仲間である。「今は家が建ち並んで田中さんの家も松井さんの家もちよっと遠い感

じになっちゃったけれど、あの頃はあんまり家がなかったから、みんなおとなり同士みたいな感じでした(笑)」

世話人会は、やがて正式なPTA活動へと移行していく。その頃登場するのが今は「はまかぜ」の編集をしている尾崎みつ子氏である。「尾崎さんは、PTAの広報をやつてらしたんです。とつてもユニークな才能の持ち主でもおもしろいPTA新聞を作つて、みんなに大好評だったわ」と佐藤敦子氏。これは、尾崎氏自身からは聞けなかった若き日の尾崎氏の楽しいエピソードである。

その後、佐藤敦子氏は長年民生委員を務めた。港南福祉ホームの建設にあたっては、地元のとりにまじめに「ずいぶん苦労もしたそうだ。そして、季緒氏の留学を機に国際交流の道へと進んでいったのは初めに書いたとおりである。

「街のつくりはじめに住んだことが、とてもラッキーだったのかもしれないですね。減多にできない経験だし……」——ゼロからスタートして一

緒に苦労した仲間たちのことを振り返りながら、敦子氏はそう語る。「だって、前例が何もないんですもの。何でも自分たちで考えて、苦労も多かったけど、のびのびとやってきたわ」——港南台という地域にきわだつ自発性の原点は、この言葉であるう。

インタビューの最後に「今、私が港南台で何をしようと考えてるか、わかりますか?」と、敦子氏の目がいたずらっぽく笑った。「私、港南台を国際交流の街にしたいんです。それも、欧米人だけじゃなくて、特にアジアの人たちをあたたく迎えられるような、そんな街に。港南台って、それができる街だと思っんです」

今も彼女にとって港南台は、のびのびと夢を語れる街である。そんな港南台を彼女は多くの仲間とともにつくってきた。

●おたまじゃくしはカエルになった
——田中恵美子氏・森山梢氏の
場合——

「まち1986」で述べたように「いじょうぶ会」には、様々な活動をしている人たちが「ボランティアをするお友だち」として参加している。その中のひとり田中恵美子氏(港南台六丁目)は、「いじょうぶ会」のほかに、佐藤敦子氏らとともに長年にわたって多彩な活動を続けてきたという話を耳にした。早速訪問して、田中氏の親友である森山梢氏(日野町)も交えて「いじょうぶ会」以外の活動について聞いてみた。

田中氏がこの地に越してきたのは、昭和四十年代の末、港南台への入居が始まって間もない頃だ。森山氏はそれより少し前、鎌倉街道をへだてて港南台の西側にあたる新興住宅地(野村港南台地区)に移り住んだ。まだ、家がポツリポツリとしかない頃——。鎌倉街道をはさんで田中氏・森山氏の交流は、ごく自然に始まった。

田中氏の家に近い港南プールは、オープンしたばかりで閑古鳥が鳴いていた。そこで、森山氏、田中氏らお母さんの水泳グループ「おたま

やくし”が産ぶ声をあげる。佐藤敦子氏や、めじろ団地で長年民生委員を務め、いじょうぶ会”の設立にもかかわった伊東小夜子氏（現在は他地区に転出）などもその頃からの仲間だ。また同じ頃、開校間もない港南台第一小学校の世話人会でも、すでに書いたように佐藤敦子氏を中心に、松井佑子氏や田中氏の”人の輪”ができてつあつた。

五十年頃から、田中氏は食料品などの共同購入活動を始めた。「家族に安全ないいものを食べさせたい」というのが第一だが、当時港南台にはほとんど商店がなくて不便であったことも大きな理由だった。「それに、当時、食品公害などが世間で話題になっていて、お母さん方はみんな関心を持っていました」と田中氏は振りかえる。

佐藤氏へ、森山氏へ、松井氏へ、そして多くの人たちへ、共同購入の輪はひろがっていった。「私たちは単品主義。ひとつのところから全部とるのではなくて、牛乳はここ、お豆腐はここ、というようにひとつひ

とつ自分たちでさがしていいものを見つけてるんです」と森山氏。

共同購入の輪は”食”という主婦の共通関心事を通して、様々な料理教室などへ発展していった。そのひとつに原材料を共同購入して各家庭でミソを手作りする活動がある。田中氏のノートには、各地区のとりまとめ役の人の連絡先と原材料の購入量がビッシリ書きこまれている。ミソ作りの輪はひろがる一方で、今では港南台全体で約四百世帯（野村港南台地区も含む）、原材料の購入金額は総額百五十万円にものぼる。「共同購入は、いろんな約束事をみんなが守らないといけないし、お金がか

らむので、信頼関係がとて大切なんです」と田中氏は強調する。何よりも同じ地域に住み、ロクに商店もない頃から生活を守るために一緒に苦労してきたということが、信頼関係の基盤になっているのだろう。

港南台八丁目のはずれにある港南台消防出張所の訓練室を利用した体操教室——ここからひろがる人の輪も田中氏から教えていただいた。毎

年六十人ほどのメンバーを集めてやっているが、体操だけにどまらずヨガ、山歩き、社交ダンスなどいろいろなグループにつながっていくと言う。「みなさん、好きなものはいろいろありますから。山歩きのグループは毎週近くの公園に集まって円海山へ行っているようです。円海山の植物にとってもくわしい人がいるんですよ。社交ダンスは、少年野球の指導をしていた人のOBが中心になって、土曜日に港南台第一中学校の開放を利用しています。みなさん子どもが大きくなったので、家に子どもを置いて夫婦で楽しんでいるようです」

森山氏は、田中氏の言葉を補足するように次のように語ってくれた。「ひとりひとりが多面性を持っているんです。だから、いつも同じグループの小さな輪の中にいるんじゃないかと、たとえば水泳をするときはこのグループ、趣味で絵を描くときはこっちのグループ、ボランティア活動はまた別のグループ、というふうにいるんなグループに顔を出すよう

にすれば、人の輪がいく重にも重なっていくんです。ひとりひとりの個性がとっても大事なね——「まち1986」が主題とした”地域の重層的な構造”とは、地域のひとりひとりの住民から見れば、まさにそういうことなのだ。

十年來の親友だけあって、インタビュウの間、田中氏と森山氏のコンビネーションは絶妙だった。大きな目を輝かせて情熱的に語る森山氏と、もの静かに活動を振りかえる田中氏。十年前の”おたまじゃくし”の頃の話になると、二人の目が懐しさでいっぱいになるのが印象的だった。

十年前のメンバーは、今、それぞれの道に進んで活躍している。「おたまじゃくし”が生まれた港南プールで、今は障害児の水泳指導に情熱を燃やす森山氏。港南台という地域のワクを超えて国際交流というひろい海へ泳ぎだした佐藤氏。「みんながそれぞれの道を見つけて別々に歩きただすのは自然なことだと思いません。だけど、一度生まれつながら

は、決して切れてしまうことはないのよ」と森山氏は言う。「だって、ローンが残ってるかぎりは(笑)ここが永住の地なんです。みんな、ここで年老いていく。だから、みんな

一生の友だちだと思っから……」

十年來の友だちのひとり松井佑子氏は今、港南台連合自治会の役員として、港南台駅周辺の放置自転車・バイク問題の解決のために毎日献身的な努力をつづけている。しかし

「正直言つて、地域の中で松井さんへの批判の声も耳にします。人の上に立つて活動するっていうのは難しいんでしょね。でも、私たちは、第一小の世話人会の頃から、ずっと松井さんと一緒にがんばってきたし、子供会やサッカークラブの世話を一生懸命やっていた彼女を見てきたから……」と田中氏。今ではほとんど活動の場も別になったが、何かあったとき連絡をとりあう「人の輪」は大切に生きつづけていると言う。十年がたつて「おたまじゃくし」は、それぞれ個性的なカエルになった。そして、それぞれの「大きな海」

を見つけて今、生き生きと泳いでいる。「おたまじゃくし」の頃を決して忘れることなく……。

●「休み時間」がにぎやかデス

堀俊子氏・池田京子氏の場合

港南台を中心にコミュニティー・パーとして発行されている「港洋新聞」(現在は「タウンニュース」と改称)——その六十一年七月二十四

日号に「コミュニティー・スクール、学びなおす日本史」の受講生募集記事が載った。八月六日～十一月二十六日の水曜日、午後三時半～五時、港南台高校で、同校の北村先生を講師に近・現代の日本史を学ぶ、と言う。連絡先の堀俊子氏(港南台一丁目)に会って話を聞いた。一緒に世話役をしている池田京子氏(港南台五丁目)が同席してくれた。

「初めは県のコミュニティー・スクールとして発足して、もう五年ぐらいいになります。去年からは、県から離れて完全に「自主講座」になりました」——最初は世話役を自治会関係

の人がやっていて、メンバーも港南台の人だけだったそう。それが段々と「好きな人」が世話役になり、くち・コミで南区・戸塚区などにメンバーがひろがっていった。「北村先生の人柄にひかれて、港南台高校の学区にくち・コミでひろまっています。特別に募集しなくても毎年五十人くらいは集まります」と堀氏。今年はそれに加え「港洋新聞」で十人くらい集まったそう。

会費は、全十五回で三千元。講師への謝礼など、すべて会費でまかなく。金銭的・時間的な負担を少なくすることが「長続きのコツ」だそう。だ。「宿題も出さないし、出席も強制しません。そういうことをすると、結局長続きしませんから」と池田氏は言う。

メンバーの人たちは、この講座に何を求めているのだろうか。「日本史を学ぶということよりも、人との「出会い」とか「語らい」じゃないかしら。だから、講義中よりも休み時間の方が活気があります(笑)」。最初は、それでいいのか?と思いま

したが、今は、そういうことが大事なんだと思うようになりました」と堀氏。新興住宅地で近所づきあいも少ないが、こういう場所で意外と近所の人と出会ってつきあいが始まる、ということもあるそう。仲間づくりのキツカケなんですよ。だから、みんな楽しみに参加してくれます。みんなが楽しんでくれるので世話役もやりがいがあります。普通こういうサークルって世話役のなり手がなくて困るんですけど、ここは「来年の世話役は……」って言う手をあげる人がいるんですよ。私、ビックリしました(笑)」。堀氏も池田氏も以前、自治会の役員を経験したことがあるが、やはり「コミュニティー・スクールの世話役の方が楽しい」と言う。「自治会はみんな当番で仕方なしにやってる感じだから……」。しかし、二人の出会いには「あまり面白くなかった」という自治会役員時代である。二人は別々の自治会であるが、港南台連合自治会の婦人部の書記の仕事を通じて知りあった。池田氏は「自治会の役

員になって連合に出てみたら、いきなり『書記をやれ』と言われて……。なんてコワイところに来てしまったんだらう、と思いました(笑)」。と当時を振りかえる。池田氏の任期が終わって、後任が堀氏だった。書記の引きつぎは、大変である。その引きつぎをした二人が、のちにコミュニケーションスクールで再び出会う。「こんな素晴らしい友だちに出会えて、今では書記をやられたことに感謝しています」。「最初は強制的にやらされたけど、段々楽しさに変わっていききました」——楽しさに変わっていったのは、当時港南台連合自治会婦人部長だった岡田美智子氏(「まち1986」港南台ひまわりクラブの項参照)の人柄によるところが大きいと言う。今でも当時のメンバーは時々会って食事をしたり、たまにバス旅行に出かけたりするそうだ。半ば強制的にやらされ、決して「面白くはなかった」自治会役員の経験が、今では貴重な財産になっている。「もしあの時、あれをやらされなかったら、きっと自分のカラ

に閉じこもった生活をしてたんじやないかしら」と池田氏。ひまわりクラブの取材で岡田氏が語ったのと同じことを彼女も言った。そして「なんとなくみんなが集まりやすい雰囲気って、やっぱりリーダーの人や一緒にやってる仲間の人柄から出てくるんじゃないかな、と思います」——そういう人柄が岡田氏にも堀氏にも共通していると、池田氏は語ってくれた。

堀氏は、このコミュニケーションスクールのほか、港南台高校PTAのOBのバス旅行など「つい世話役を引き受けてしまうんです」と笑う。「人が喜こんでくれるのが好きなんです。私が好きでやってるんだ」と自分に言いかかせて……。家族はあきれてるようです(笑)」。地域で、人は何のために集まるのだろうか。究極においては、語りあえる人間関係を求めているのではないだろうか。そのキツカケは、順番で回ってきた自治会やPTAの役員であったり、ちよっと興味を持った日本史であったり様々だが、そこに

は必ず「出会い」があり「ふれあい」がある。そして人は「出会い」を繰り返しながら、自分が一番「いやすい」場所に落ちていく。そうした、それぞれの「いやすい」場所の重層的なネットワークこそが、そこに住む人々にとっての「地域」なのだろう。

●お母さんはPTAのカメラマン —坂本まち子氏の場合—

YFUの留学生たちが港南台第一小学校を訪れた時の写真がほしくて、白石伸子校長に連絡をしたら、PTA広報委員会の坂本まち子氏を紹介してくれた。早速訪ねてみると、健康そうに日焼けしたママさんが、写真を用意して待っていてくれた。第一小学校に近い、めじろ団地の一室が、坂本氏のお宅である。

どこの学校でもそうだろうが、PTAには広報委員会をはじめ、様々な委員会がある。そのメンバーを、学年のはじめに各クラスの父母から選ぶわけだが、自ら進んでなりたが

る人は滅多にいない。子どもが卒業するまでに一回はやらなければ……という雰囲気がある。そこで「委員を選ぶ懇談会に出るのは気が重いです。どうしてもやりたくない、という人は欠席しちゃうんです(笑)」ということになるそうだ。

広報委員は、写真を撮ったり文章を書いたり大変なので、特になり手がない。坂本氏は、たまたま選ばれてしまった。多分、最も平均的な「PTAの広報委員さん」の姿なのだろう。

港南台に入居が始まって十二年。数少ないかつての農家を除けば、この地で生まれ育った大人はいない。よそから移り住んだ人々が地域とのつながりを持つのは、子どものことがキツカケになることが多い。「子どもがいない人は、自治会にも入っていないことが多いようです」と坂本氏は言う。

坂本氏がめじろ団地に越してきて六年。現段階での地域とのつながりを聞いてみた。「自治会の役員は、まだ順番が回って来ないのでやって

いません。子ども会もやったことがないので、来年やるのが今から決まっています。PTAでは、「泳ごう会」というサークルがあって、そこでは代表をやっています——「泳ごう会」というのは、第一小のPTAとそのOBによる自主的なサークルで、毎週水曜日に、近くの港南プール（環境事業局港南工場の余熱利用施設）で水泳をやっている。メンバーは現在六十人くらいで、坂本氏はもう四年目、同じじろ団地に住む男性がコーチをしているそうだ。

「代表」というのは、坂本氏によれば「誰でもいいんです。手続きなどをするとき、誰か代表がいないと困るので……」ということだ。

また「夫が二年間、管理組合の役員をしました。管理組合というのは夜に会合があって、夜中まで飲んでいます。大変だったけど、面白かったみたいですよ、飲むのが（笑）。いるんな人と知りあえて」

「泳ごう会」では管理組合と違って（？）あまりメンバーが飲み食いすることはないそうだ。「みんな子

どもをかかえてるお母さんだから、そんな余裕はないですよ。みんなマジメです」

小学生の子どもを持つ母親の平均的な地域とのつながり方は、多分こんなところなのだろう。自分から積極的に、ということはないが、順番が来れば役員をやる。「最初はやっぱりイヤですよ。でもその時の委員のメンバーによって、仲間としてのつながりみたいのができれば、終わってみて「楽しかった」っていうことになるんじゃないかしら」

インタビュ어의途中、坂本氏とはずいぶん写真の話をした。広報委員としての写真の撮り方の話。そして次号のPTA広報の編集方針の話。

「たまたま選ばれてしまった広報委員」だが、結構楽しそうである。

坂本氏は来年少子ども会の役員をやり、また何年か後に自治会の役員をやることだろう。多分、今と同じように楽しそうに、子ども会や自治会の行事の裏方を務めるのだろう。その後、もう一度、坂本氏と話をしたい、と思った。

インタビュを終えてめじろ団地からの帰り道、こんなことを考えた。

佐藤氏、田中氏、堀氏をはじめ、地域活動の中心にいる人たちも、最初からそうだったわけではない。今では子どもが大きくなって活動している人も、初めは坂本氏のように少しずつ手さぐりで「港南台」という地域と出会っていったのだ。坂本氏は今、そうした「出会い」の真っ只中にいる。彼女が、順番で回ってきた役割を生き生きと楽しそうにこなしていることは、とても重要なことのように思える。

●ワタシ「子供会」、アナタ「自然保護」

—金子玲子氏、吉田基子氏の場合—

今「港南台」という地域と出会い始めた人の話をもう少し聞こうと、「はまかぜ」の尾崎氏に「目立たないけど港南台でフツーに活動している人を紹介してください」とお願いしてみた。「八丁目の円海山のふもとに、ひよどり団地という比較的新

しい団地があるんです。その前の自治会長さんを知っているので、聞いてみましょう。新しい団地なら、

地域活動を始めたばかりという若い人も多いでしょうから……」そうして二、三日のうちに尾崎氏は、ひよどり団地の環境事業協力員で子供会のお手伝いもしているという若いお母さん、金子玲子氏を紹介してくれた。ひよどり団地は、円海山の登り口に五年ほど前にできたタウンハウス式の団地である。金子氏の家の裏側はすぐに円海山の雑木林で、夏にはオニヤンマなど様々な昆虫が庭を訪れる。今でも時折、ノウサギを見かけることがあると言う。

金子氏がここに住んで、まだ一年半。引越してすぐに自治会の幹事を引受けた。「やる人がいなくて順番みたいな感じ……。前に住んでいたところ（磯子区汐見台）でも自治会の役員をやっていたので、わりと自然に引き受けました。私、勤めをやめてまだ間がなかったのです。家の中にこもっているのは苦手なんです。それで、できる範囲のことはやってみよ